で、日本の話をするようにという依頼が二、三あって、私は当惑しながらも私なりの日本紹介につとめたりした。一九七〇年から七一年の頃である。

カナダ生活も二年を経過した頃から、やっと落着いて周囲の様子がわかるようになってきた。私の普段の生活範囲は大学の構内に限られていたから、私の知る「世間」は狭いものだった。私は自分が常に「日本人」なのだという自覚、私という人間はカナダ人にとってはいつも「日本人」なのだという思いにとらわれるようになった。将来、英語がこちら生れの人並みに流暢になり、つき合う人間はカナダ人だけ――というようなときがくるとしても、彼らの目には私は依然として日本人なのだということが、身にしみてわかるようになってきた。新移民として社会のメンバーになったとはいえ、顔色の違った異人種であること、日本人であることが、実際どのようにマイナスになるのであろうか。かつて日系人は西海岸では徹底的に嫌われ、排斥され、ついには住んでいるところから追われるような目に会っているけれど、「戦後派」の私は、将来どんな事態にでくわすのだろうか。そんなことを考えてみるようになっていた。

自分が日本人であるという自覚は、日本人以外の他人がそう見ることから生まれるようなものである。他人は無意識にではあるが、常にお前は日本人なのだという態度で接してくるから、こちらもその期待に応えて反応し、行動するようになる。カナダ人の間には「日本人とは、日本とは」云々という一種の定義があって、私たちはそれから自由になることは出来ない。「日本という国はアジアの一国であるが、高度に工業化した、高い生活水準を維持している国である。古い特異な文化があり、近代的な科学も発達している。それらを勤勉に働く一億余の人間がささえている」というのが定義の内容のようだ。これは十年あまり変わることなく、どちらかといえば好ましい方だと言えよう。中国やインドから来た友人が、冗談に、カナダでは日本人であることの方が(中国人やインド人であるより)よっぽど肩身の広いことなのだと言ったのをおぼえている。私という人間の、この社会における位置づけが、大いに日本という国から来た人間であることによっていることを思えば、その定義を背後に他人に接しられ、自らも他人に接することが出来たことは、プラスにこそなれ、マイナスにはなっていないのではないだろうか。もし私がカンボジアとかラオスとかネパールとかそんな未知の、発達のおくれた国から来た人間であったら、カナダ人は私にどんな態度で接してきたであろうか。

私個人の学生生活は、一日中図書館でばかり過ごすようなものであったが、まずまず平穏無事であった。そんな学生生活が都合七年間も続いたから、私の移民としての「社会の荒波」との対決はずっとおくれたが、カナダ社会への理解は深まった。日本とはあまりに異質な社会であることに間違いないのであるが、単に二つの社会を比べてみるだけでなく、相違の原因を知ることが課題になってきた。

カナダ大陸を西から東まで踏破し、一応国土のもつ距離感を体得したところで、この国はただ大きいだけでなく、とてつもなく多様で複雑な国であること、それは同時に大変理解しにくい国でもあるということがわかってきた。時がたつにつれて、私にはそれが何か重荷のように感じられるようになった。

一九七〇年前後には、ケベック州の独立分離運動が盛んであった。大学で出会うケベック人は、そろって分離主義者であった。彼らは仏語系がいわゆる二流国民としての地位に甘んじている年月があまりにも永すぎた。それはどんな人間の精神衛生にもよくないことだ。分離の時は近づいた――とインテリらしい意見を私に聞かせるのであった。

表彰式に出席した入選者の方々。左から橘さん、塩入さん、多田さん、西原さん、ランキン大使、近藤日加協会会長、坂本さん、佐藤さん、権田さん、内野さん。

多様性文化主義、二か国語主義などが、国の政策となって啓蒙されるようになった。カナダは人種的、文化的にそれぞれ異なった人間から出来上っている。お互いの相違を認め合うことから理解がはじまる、違っていること自体がすばらしいことなのだというのは、イデオロギーとして結構なことのように聞こえるけれど、日本のような「超統一」国家から出てきた人間にとって、時には国の統一が危うくなりうるということ、少なくともそういう認識を持つ必要があるということは、考えてみれば深刻である。

連邦政府と各州の首長が年に何回か会って討論をし、お互いの間の関係を確かめ合う。主題はいつもつまるところ、どうしたら一緒になっていられるかということであり、ちょうど夫婦関係のように、別れられそうで別れられないのが、カナダの統一国家としての姿なのではないだろうか。首長の会合は一種の儀式のようになって、恒例行事としてくり返すことにだけ意義があるようである。私には彼らがたとえ何十回会合をくり返しても、お互いの相違と利害を乗り超えて一つのまとまりを作り上げるのは、至難の業のようにおもえる。少なくとも近い将来にはあり得ないことだと私は思っている。